ポスト世俗化時代における在日コリアンの宗教

大阪市立大学　宮下良子

1　目的

在日コリアンを表象する言説では、エスニック・アイデンティティを再生産、再活性化させるための装置として宗教をとらえるという方法がこれまでの先行研究では一般的であった。しかし、報告者は日本社会において在日コリアンと日本人がそれぞれの文化を共有しながら構築している日常生活の中から「民俗」や「宗教」を再考するという視点、いうなれば共存、共生という点に注目してきた［宮下　2005、2009］。その中でも本報告の「在日コリアン寺院」のネットワークを構成する宗教者の多くは1980年代以降に日本に来日し、彼ら／彼女らの動向はトランスナショナルな様相を呈している。同時に、戦前、戦後の在日コリアン一世から世代交代を経て、その宗教活動も地域社会に根差しながら変容し続けている。世俗社会と宗教が翻訳を通じてともに理解し合い、啓蒙されることを示唆した概念が「ポスト世俗化」であるとした場合、「在日コリアン寺院」の宗教者たちの宗教的実践はポスト世俗化時代においてどのように解することができるのか、本報告はそのための試みである。

2　方法

報告者は、先の『生駒の神々』刊行後、四半世紀を経た2009年の生駒山地の追跡調査に参加してから、在日コリアン寺院の「山の寺」と大阪市内の「街の寺」を結ぶネットワークが形成されてきたことを知り、個人研究として現在にいたるまで上記の宗教者たちとのラポールを形成しながら、聞き取りや宗教活動の参与観察を継続している。また、信者たちへの聞き取りも収集し［宮下　2015］、2015年から、韓国本土の太古宗（朝鮮の禅系仏教宗派。僧侶は妻帯）や曹渓宗（朝鮮の禅系仏教宗派。不妻帯）寺院への聞き取り等も開始している。

3　結論・課題

在日二、三世のアイデンティティの多様化やニューカマーの往来が顕著な今日では、次世代の信者獲得は困難である。このことから、南北や宗派や民族を超えた活動―2010/4/3 御幸森天神宮への花礼式、7/15 黄檗宗大本山萬福寺（中国系）の中元法要への参加、東日本大震災による義援金および被災者慰霊活動―を実施し、従来の在日コリアン社会にはなかった宗教者同士の共通の目的意識もった対外的な宗教活動を展開しており、また、民族の境界を超えた宗教活動を信者との関係からも実践している。このような民族・伝統宗派の脈絡から引き離す「脱埋め込み現象」は、ある意味において現代社会の過度な合理化―医療、福祉、既成宗教―に抗う言うなれば世俗社会の人々のニーズに促され、呼応するかのように人々に寄り添い変容してきたともいえる。今後も存続、継承のためにその方法を絶えず模索しながら再構築している在日コリアンの宗教を介して展開されるこのような翻訳実践のあり方に注視していきたい。

文献

宮下良子，2012a，「在日コリアン寺院の新たなアクション―その先へ」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々―変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』創元社.
宮下良子，2012b，「在日コリアン寺院―ローカリティ／トランスナショナリティの視座から」大谷栄一、藤本頼生編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 第2巻 地域社会をつくる宗教』明石書店.
宮下良子，2016，「『朝鮮寺』から『在日コリアン寺院』へ―コロニアル／ポストコロニアル状況における在日コリアンの宗教的実践―」『人文学報』第108号，49-63頁.